

マウク（設・儲）の語源について

間 宮 厚 司

はじめに

今日、我々が「お酒の席をもうける」などと言う場合のモウケルは、△用意する√の意である。また、「お金をもうける」のモウケルは、△利益を得る√の意である。なぜ、モウケルは△用意する√意と△利益を得る√意の両義を持つに至ったのだろうか。現代語のモウケル（下一段動詞）は、古典語ではマウク（下一段動詞）と言っていた。マウクの原義は何か。本稿は、マウクの語源について考える。

一

まず、動詞マウクの実例を意味分類した上で、列挙してみる。

① 用意する

○ 渡り守船もまうけず（布祢毛麻宇氣受）橋だにも渡してあらば（萬葉一八・四一二五）

○ 『中宿りをまうくべかりける』など言ひて、夜更けておはし着きぬ。（源氏・手習）

② 待ち迎える

○ 而る間兄まうけて待つ事なれば、兄程なく火を燃して持て来たり。（今昔二七ノ三五）

○ 誰をまうけん為の座席やらん。（太平記・三・主上御夢）

③ 身に持つ

○ 神仏に祈りて、今の御腹にぞ男君一人まうけ給へる。（源氏・紅梅）

○この世には過ち多く財を失ひ病をまうく。(徒然草 一七五段)

④得をする

○耳鼻欠けうげながら抜けにけり。からき命まうけて久しく病みゐたりけり。(徒然草五三段)

このうち、①の八用意する√は「機会をもうける」、③の八身に持つ√は「一子をもうける」、④の八得をする√は「お金をもうける」のように、現代語のモウケルにも同じ意味が確認できる。なお、②の八待ち迎える√は、現代語のモウケルには見当たらない用法である。

さて、マウクの原義であるが、それは△来たるべき事態に対して、前もって用意する√ことであつたと思われる。「まうけのきみ(儲けの君)」が皇太子を表わすのも、あらかじめ用意してある天皇の意からである。来たるべき事態に対して、前もって用意するという行為は、来るのを見込んで、待ち受け、迎える意味に発展する。そして、その待っていたものが実際に来るところから、身に持つといった意味へと拡大し、それが、思わぬ良いものを手に入れた場合に、得をする意味になつたと解釈される。

古典語マウクの意味変化の過程を、以上のように跡付けるならば、現代語のモウケルに八用意する√意と八利

益を得る√意が存することも、自然に理解できよう。

二

ところで、奈良時代にはマウクならぬマクの語形が見られるので、次にそれを示す。

○梅の花散り乱みだひたる岡傍かたはらには鶯鳴くも春かたまけて

(波流加多麻氣三) (萬葉五・八三八)

日本古典文学大系「萬葉集二」の八三八番歌の頭注には、右の「春かたまけて」について、次のような説明がなされている。

時が移って春になって。カタマケのカタは、時・方向などを漠然と指す。マケはマウケの約。起源的にはマは間、ウケは受け、mauke→makeである。然るべき間を受ける意から、あらかじめ用意する、待ちうける意となり、カタマケと熟合して、時を待つ意となり、時が移ってある時期に達する意となつた。一方、「小学館古語大辞典」のマウクの項目の語誌には、次の記述がある。

上代に「秋かたまけて(麻氣三)」八万葉・一五・三六一九√など、「まく」の語形があるため、「まく」は「まく」のウ音挿入形だとする説がある。しかし、母音の連続を嫌う傾向にある上代語で、敢

えてウを挿入する必然性は乏しい。恐らく、「まうく」の方が原形で、「まく」はその母音脱落形であろう。「まうく」は、「間受く」であるとする説もあるが、あるいは「真受く」か。後者ならば、「真」は完全・十分の意であり、「真」が動詞に冠せられた例には、「真罵（ぬま）る」「真探（まさま）る」「真抜（ぬま）かる」などが考えられる。「山口佳紀」要するに、マウクの語源説には、現在次の三つの考え方があることになる。

①「春かたまけて」などに見られるマクが原形で、それに母音ウが挿入されて、マウクは成立した。

②マウクを「間受く」と分析する。

③マウクを「真受く」と分析する。

右のうち、④は確かに奈良時代にマクの語形があり、平安時代以降はもっぱらマウクの形で安定するので、通論的観点からマクを原形と考え、それに母音ウが挿入されたのがマウクであるという解釈は、一応成り立つ。しかし、「小学館古語大辞典」も言うように、母音の連続を嫌う傾向にある上代語で、敢えてウを挿入する必然が乏しいことと、ma ku / ma ku のような音変化を起した語例が他に見出せないことから、①説は承認できない。それに対して、②と③はマウクの方を原形と見て、その

マウクをマ（間 or 真）とウク（受）に分析する点で共通する。だが、②③両説は次の弱点を有する。すなわち、マウクが原形で、「春かたまけて」などのマクは、その母音ウの脱落した語形と見るとき、どうして、o u o u（Cは子音、Vは母音を示す）という安定した ma ku の形ではない o u o u という不安定な ma ku の形の方が、平安時代以降定着し、比較的長期間保持されたのであるか。

○夕さらば屋戸開けまけて（屋戸開設而）われ待たむ

夢に相見に来むとふ人を（萬葉四・七四四）

○天の河相向き立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き

まけな（紐解設名）（萬葉八・一五一八）

○夏影の房の下に衣裁つ吾妹裏まけて（裏儲）わがた

め裁たばやや大に裁て（萬葉七・一二七八）

○近江の海沖つ島山奥まけて（奥儲）わが思ふ妹が言

の繁けく（萬葉一・二四三九）

これら萬葉集における「設・儲」は、普通皆マケと訓んでおり、意味も八用意する・待ち受けるVの意で、中古以降のマウクと当然つながるものである。そもそも、萬葉集で「設・儲」の文字をマウクでなく、マクで訓む根拠は、一体どこに存するのか。それは、

○春かたまけて（波流加多麻氣弓）（萬葉五・八三八）

○秋かたまけて(秋加多麻氣弓) (萬葉一五・三六一九)

のように、仮名書きでカタマクの例が存在し、そのカタマクのマクの部分が今度は、

○時かたまけぬ(時片設奴) (萬葉一〇・一八五四)

○冬かたまけて(冬方設而) (萬葉一〇・二二三三)

○夕かたまけて(夕片設而) (萬葉一〇・二一六三)

のように、「設」字で表記されているところから、カタマクでない場合にも、「設(儲)」はマクで訓むのが、穩当と判断した結果なのであろう。カタマクのカタが何であるかは難しいが、マクは明らかに八待ち受け、迎えるVの意味を持つ。なぜならば、「春かたまけて」は、口語訳するときには「春になって」だが、これは完全に意識であり、忠実に直訳するならば、「春を待ち受け、迎えて」と訳すべきだからである。

今「設・儲」は、萬葉集で一般にマクと訓まれていることについて述べた。ところが、「設・儲」は「観智院本類聚名義抄」では、共にマウクと訓まれているのである。先にマウクの語源説として示した⑩⑪兩説で、想定される音変化の道筋は、マウクVマクなのに、文献的な徴証からは、マクVマウクという全くの逆方向をたどっているように見えるのは、なぜなのか。奈良時代にも、

実際には、

○船もまうけず(布衾毛麻字氣受) (萬葉一八・四一二五)

のように、マウクの確実な例が見えている。そうすると、先の「屋戸開設而」を「やどあけまけて」ではなく「やどあけまうけて」と訓み、「紐解設名」を「ひもときまけな」ではなく「ひもときまうけな」と訓むことも、十分考えられる。なぜならば、萬葉集の中で一般にマクで訓まれている「設・儲」字をマウクと訓んでも、句中に単独母音を含む形となるため、本当の字余りにはならないからである。

それはともかく、少なくとも奈良時代には、

○春かたまけて(波流加多麻氣弓)

○船もまうけず(布衾毛麻字氣受)

のように、マクとマウクの両語形が共存していた。にもかかわらず、どうして、母音連続を語中に含むマウクの語形の方でもって、平安時代以降固定してしまったのであろうか。古代日本語では、原則としてCV構造が強く買かれていたはずなのに、なぜ、そのCV構造を崩したnakkuというCVVCVの形にて一語化を遂げたのであろうか。マウクをマ+ウクと分析する考え方は、以上の矛盾を解消することは困難と思われる。したがって、

マウクの語の構成は、再検討する余地がまだある。それでは以下、マウクの語源について、私見を述べてみたい。

三

私は、マウクの原形をマナラクと考える。その場合、ラクが何であるかが問題になる。下二段動詞ラクの例は文献の上で確認できないが、四段動詞ラクの例は実在したので例を挙げてみる。

- ①是に其のをきし（遠岐斯）八尺の勾瑠、鏡及草那芸劍、亦常世思金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて、（古事記・上・天孫邇邇芸命）
- ②正月立ち春の来らばかくしこそ梅をきつつ（烏梅平々岐都々）楽しき終へめ（萬葉五・八一五）
- ③み冬継ぎ春は来れど梅の花君にしあらねばをく人もなし（遠久人毛奈之）（萬葉一七・三九〇一）
- ④三島野をそがひに見つつ二上の山飛び越えて雲隠り翔り去にきと帰り来てしはぶれ告ぐれをくよしの（呼久余思乃）そこになければ言ふすべのたどきを知らに（萬葉一七・四〇一一）
- ⑤月立ちし日よりをきつつ（日欲里乎伎都追）うち徳ひ待てど来鳴かぬほととぎすかも（萬葉一九・四一九六）

⑥「呼　ラク」（色葉字類抄、前田本・黒川本共）

⑦「呼餌　ラクエ　鷹呼餌也」（易林本節用集）

ラクには、「招く・招き寄せる」とか「呼ぶ・呼び寄せる」といった訳語が通常与えられているが、今示した例に基づいて、より一層厳密な意味付けを施すならば、ラクは△対象に来てほしいと気持ちの上で切に待ち受け迎える▽意となろう。つまり、①は天の石屋戸から早く天照らす大御神に出て来てほしいと一所懸命待ち迎えたのであり、②③は梅の開花を心待ちに迎える意である。④は逃げ去った鷹を呼び戻す手段のないことを嘆いているが、この鷹は「手放れも還来もか易き」と優秀なのである。その秀つ鷹が待てども帰って来なくなったので、「心には火さへ燃えつつ思ひ恋ひ息衝きあまり」の切羽詰まった心境なのである。鷹狩のために鷹を放して呼び戻すという特殊な訓練のあったことは、⑦の例を見るとよくわかる。⑤はホトトギスの来て鳴くのを毎日まだかまだかと待っているのである。そして、ラクに漢字を当てるならば、「呼」が一番ふさわしいことを⑥⑦は物語っている。

そこで、この四段ラクに対する下二段ラク、すなわち△対象がやって来ることをあらかじめ予想して、用意して、待ち受け、迎える▽意の下二段ラクが、かつて存在

したと仮定してみる。これは、必ずしも無理な想定ではないと思う。そう考える理由は、次のごとくである。

平安時代以前に例の見られる動詞で、四段と下二段の両活用形式を有する他動詞として、山口佳紀「活用形式の変異から見た動詞の一考察」(『古代日本語文法の成立の研究』所収)は、

ウム(埋)・カク(懸)・カスム(掠)・サク(放)・サマタグ(妨)・タクハフ(蓄)・タトフ(譬)・ツミナフ(罪)・トトノフ(整)・トモナフ(伴)・ネギラフ(勞)・ハラフ(祓)・ハルク(晴)・フタグ(塞)・マトフ(纏)・ヨス(寄)・ワク(分)・ワスル(忘)・ヨシフ(教)

の一九語を挙げている。そして、これらの中で、ワスル(忘)に関しては、四段ワスルと下二段ワスルとで、意義差のあったことが、有坂秀世「『わする』の古活用に ついて」(『国語音韻史の研究・増補新版』所収)によって論じられている。すなわち、四段ワスルが意識的に忘れようとする意であるのに対し、下二段ワスルの方は自然に記憶や印象が消え失せる意を表わす、という違いが両者に認められるのである。また、木下正俊「活用形式の意味との関わり」(『万葉集語法の研究』所収)では、ヨス(寄)について、四段ヨスは八与える・託する√

の意、下二段ヨスは普通の八寄せる√意という差があり、ワク(分)についても、四段ワクは八分別する・區別する√の意、下二段ワクは八掻き別ける・押し別ける√の意という差のあったことが、指摘されている。以上の事柄を考慮するならば、四段ヲク八来てほしいとひたすらに待ち迎える√とは多少意味の異なる下二段ヲク八来るべき事態に対して、用意を整えて、待ち迎える√が、かつてあったと考えることは、決して無理・不可能なこととは思われない。つまり、四段ヲクが「積極的に来てほしいと切に待ち迎える」のに対し、下二段ヲクは「用意をして、冷静に待ち迎える」と捉えるのである。

四

マウクの原形をマヲクと考えた場合、ヲクに関しては前述した通りだが、マは何なのか。断定的なことは言えないが、このマは、メ(目)の古形のマ(目)ではあるまいか。マ(目)が動詞と複合したものは、

マカツ(目勝ツ)・マグハフ(目合フ)・マタタク(目叩ク)・マバル(目張ル)・マミユ(目見ユ)・マモル(目守ル)

などがある。よって、マヲクの原義は八目でもってしっかりと見ながら、来たるべき事態に対して、あらかじめ

用意して、待ち受け、迎える \searrow と定義される。その点、マクはマメル \searrow 目でもってしっかりと見ながら、守護する \searrow と語の構成が、似通っていると言えよう。

ところで、マウクの原形として想定したマクは、

mawku \searrow mawku \searrow mauku

という過程で、音変化を起こしたと推定される。そして、おそらく奈良時代は、mawkuからmaukuへの丁度過渡的な時期にあったのではないか。だとすると、先に見た萬葉集のマク語形は、mawkuの発音を表記したものと考えられる。mawkuのwは半母音であり、まだ完全な母音uにはなっていないのであるから、それは表記に現われなくて当然である。それがmanuの段階に至って、マウクと表記されるようになったのであろう。

さらに、今想定したマクの音変化を考慮に加えると、次の現象も合理的に説明しやすくなる。

① 近江の海沖つ島山奥まけて(奥儲) 我が思ふ妹が言の繁けく(萬葉一一・二四三九)

② 近江の海沖つ島山奥まへて(奥間経而) 我が思ふ妹が言の繁けく(萬葉一一・二七二八)

③ 奥まへて(奥真経而) 我を思へる我が背子は千歳五百年ありこせぬかも(萬葉六・一〇二四)

④ のオクマケテが、③④ではオクマヘテと書かれてい

るが、なぜか。これについて、山口佳紀「古代日本語文法の成立の研究」(一六〇頁)は、次のような解釈を行っている。

いずれも将来を期待する意であるが、オク(奥)は将来の意、マク(儲)は待ち受ける・用意する意であるから、オクマクの方が元の形であろう。オクマクについては、小学館版『万葉集二』(一七七頁頭注)のように、カズマフ・ワキマフなどと同じ語構成とするものもあるが、やはりオクマクから転じたと見るのが無難である。この場合、オクマク。のクの直前の音節がマで、唇音[m]を含んでいるから、その影響でk \searrow fが生じたものと考えられよう。

右の説明だと、k \searrow Φが生じた原因として「オクマクのクの直前の音節がマで、唇音[m]を含んでいるから」と言うが、同じ条件下での類例(mak \searrow maΦ)を見出せないで、オクマク \searrow オクマフには、何か特別な事情があったと考えた方がよい。

萬葉集に、オクマクならぬオクマフの形が見られるのは、既述のごとく、マクは音声的にはmawkuであったと考えられるから、そのwkという音の連続が、Φと比較的聴覚印象が近かったために、たまたまオクマフと表記されてしまったのであろう。wkの聴覚印象がΦに近くなる

のは、両唇音で調音点が前(唇)にあるwが、破裂音で調音点が後ろ(喉)にあるkに融合的に働きかけ、kの持つ破裂性を弱化させ、後ろにあった調音点を前の方へ移動させるからである。

五

マウクが語中に単独母音ウを内包する形で、平安時代以降安定するのは、奈良時代にマウス(申)や、マキツ(参出・詣)であった語形が、やはり平安時代以降に、マウス・マウツで定着すると全く軌を一にする現象と見える。その音変化の道筋を示すならば、

* mawoku > mawku > mauku (設)

mawosu > mawsu > mawsu (申)

mawidu > mawdu > mawdu (詣)

となる。そして、このマウス(申)とマウツ(詣)は、次のようにマス・マツで書かれた例がある。

・ マウス(申)のマス表記例

○ 「人のそしられの負ひ給ふ事」と嘆かしげにまし給ふ。(栄花・月の宴)

○ 「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言ふと見て(更級・物語)

○ 「姓は何とか言ふ」と問ひ侍りければ、「夏山」と

はましける。(大鏡・序)

・ マウツ(詣)のマツ表記例

○ かくて御社にまでつき給ひて(宇津保・俊蔭)

○ さやうの所にぞ一たび二たびも聴きそめつれば、つ

ねにまでまほしうなりて(枕草子・三三段)

○ 度たびしきりてまで給ふ事は(源氏・東屋)

これらマス(申)・マツ(詣)のようにウの無い表記例が見られる事実に対して、今まで明確な答えは出されていない。しかし、こういった現象は、マスはmawsu・マツはmawduの段階の音を捉えて表記されたものと考えらるならば、自然に理解できる。mawsuとmawsu・mawduとmawduの両形が、音声的に所謂「ゆれ」の状態で、平安時代に共存していたと見ることは十分可能であり、これは奈良時代にマクとマウクの両語形が存したこともよく符合する。

おわりに

以上、マウク(設・儲)の語源について、意味および音の形態の両側面から、曲がりなりにも考察を試みた。

大和言葉のマウクが、どうして、語中にウなる単独母音を含む不審な形態をとっているのか。そもそも、論の出発点は、この疑問を論理的に解くところにあった。結

局、マウクの原形はマ+ヲクに分析して考えるのが最善と判断し、検討を進めたわけである。その結果、下二段動詞ヲクを想定することになったが、それは四段動詞ヲクと対比した上で導き出した。もともと、四段ヲク自体、古典語の世界にそれほど多く見られない古い語である。したがって、下二段ヲクもかつて存在したが、文献時代に入った時には、もう既に消滅していたか、あるいは、まだ残存していたが、たまたま文献の上で、記録されなかっただけのことかもしれない。

語源研究というと、とかく恣意的なものになりがちである。今後さらに、一語一語の厳密な研究が望まれる。

〔付記〕

本稿は、昭和六〇年度の大野晋先生の国語学演習（大学院）の学年末レポートをもとにまとめたものである。

なお、本稿の執筆にあたり、須山名保子先生より色々適切な御助言を戴いた。末筆ではあるが、記して謝意を表す。